平成２７年度

平成 27 年 8 月 8 日（土）

大桙遺跡現地説明会資料

公益財団法人鳥取県教育文化財団　調査室

大桙遺跡から鳥取市街地を望む（西から）

国土地理院 1/25000 地形図『鳥取南部』より

災厄や穢れを祓う・・・人形

人形とは木の板に人間の姿を象ったものです。災厄や穢れをうつして水に流したものと考えられています。現在でも、鳥取市用瀬町の「流しびな」がよく似た風習として残っていますが、約1300～1200年前の奈良～平安時代には、宮殿や官衙（＝役所）の祭祀で頻繁に用いられていました。

大桙遺跡では、古代の川からたくさんの人形が見つかっています。長さ数㎝の小さなものや１ｍを超える大きなもの、板に刻みをつけて横顔を表現したものや墨で顔や衣服を描いたものなど、大きさや形も様々です。中には、バラバラに壊されたものも・・・。人々はどんなことを人形に託したのでしょうか？

人形（小）

人形（大１）

人形（大２）

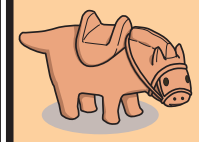
人形（大３）

身だしなみの道具？それとも・・・櫛

古代の川から、櫛が５点見つかりました。

櫛と言えば、私たちにとっては髪をとくのに使う「身だしなみの道具」ですが、日本書紀のイザナギ、イザナミの伝承にも出てくるように古代の人々にとっては「祭祀具」でもあったようです。

ウマは特別？・・・土馬・馬形



馬形

土馬

４ページで「絵馬」について御紹介しましたが、粘土を焼いて作った「土馬」や木の板を加工した「馬形」もウマを象ったものです。これらも「祭祀具」と考えられています。

ウマが単なる乗り物ではなく、祭りにも深く関係する動物であったことが分かります。

平成 27 年度 大桙遺跡発掘調査 現地説明会資料
発行：公益財団法人 鳥取県教育文化財団 調査室

〒 680-1133　鳥取市源太 12 番地　TEL：0857-51-7553　FAX：0857-51-7550
HP：http://kyo-bun.sakura.ne.jp/chosasitsu%20new.htm

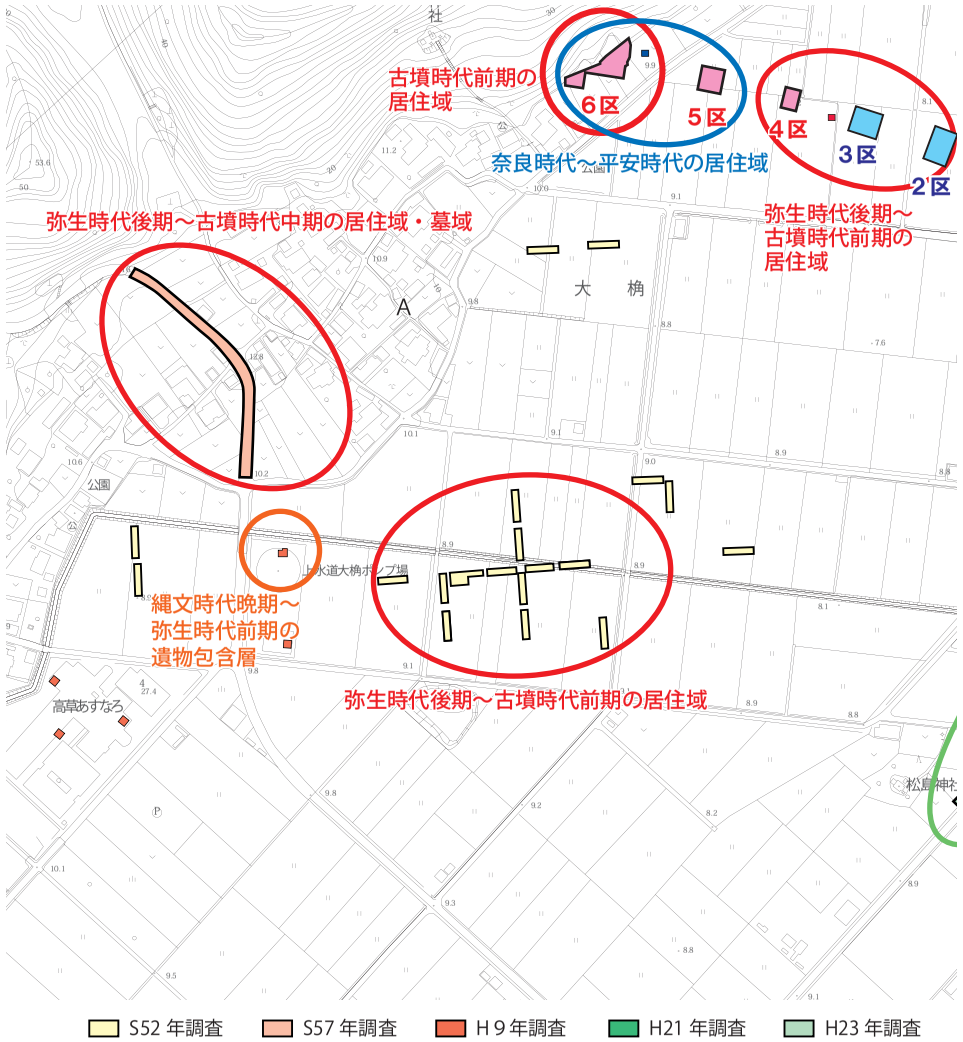
はじめに

公益財団法人鳥取県教育文化財団では、一般国道９号（鳥取西道路）の改築工事に先立ち、昨年から大桝遺跡（鳥取市大桝）の発掘調査を行っています。

この遺跡は千代川の支流である野坂川の中下流域に位置しており、遺跡の大部分は野坂川が形成した沖積平野に立地しています。これまでの調査によって、縄文時代の終わりごろから人々の活動の舞台となり、弥生時代から古墳時代には大きな集落が営まれていたことが分かっています。遺跡周辺の丘陵には、鳥取平野最大規模の前方後円墳（桝間１号墳）を含む桝間古墳群をはじめ、里仁古墳群や古海古墳群などがあり、多数の古墳が築造されています。

また、この地域は、奈良時代に東大寺（奈良）の荘園（高庭荘）として開発が進められたと言われています。

今回の調査では古代の遺物・遺構が多数見つかっており、奈良時代から平安時代における当地域の実態に迫るものと期待されます。



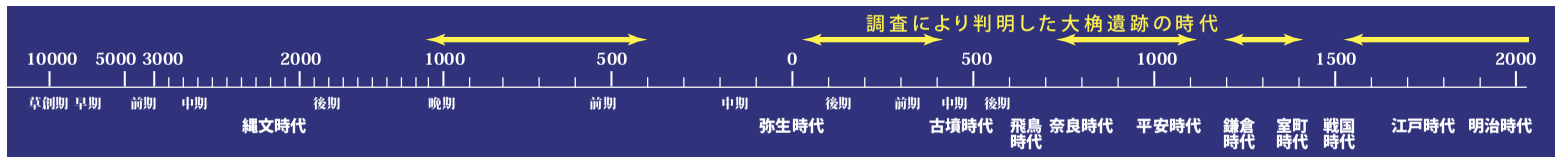
大桝遺跡とは・・・

大桝遺跡は、昭和 51（1976）年に発見され、これまでに８度におよぶ発掘調査が行われています。

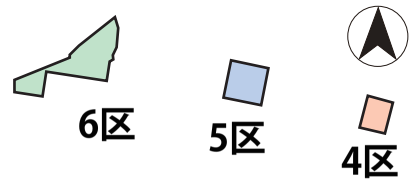
昭和 52（1977）年および昭和 57（1982）年に実施された発掘調査では、弥生時代後期～古墳時代前期（約 1,900 ～ 1,700 年前）の竪穴住居や貯蔵穴、土壙（墓）などが多数見つかり、一躍、弥生時代から古墳時代にかけての大規模集落として知られることになりました。

また、平成９（1997）年に実施された発掘調査では縄文時代晩期から弥生時代前期（約 3,000 ～ 2,400 年前）の土器が、平成 23（2011）年に実施された発掘調査では弥生時代から中世の水田に関係すると考えられる遺構や遺物が見つかっています。

このように、これまでの発掘調査によって、大桝遺跡は長期間に渡って集落や水田として利用されてきたことが明らかになってきています。



弥生時代～中世の集落（４～６区）

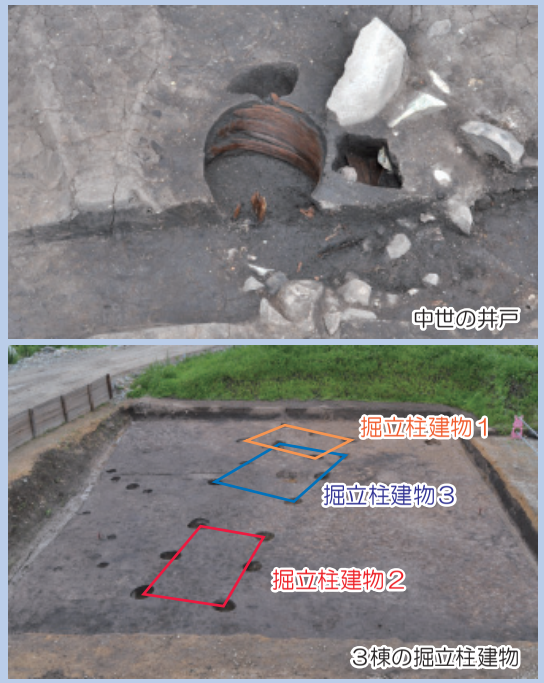


４～６区は、１－２・３・４区の西側にあり、４月から７月中旬まで調査を行いました。

４区

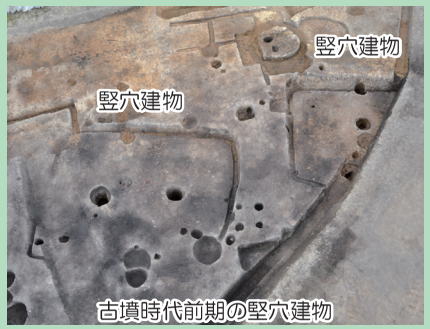
弥生時代後期から古墳時代前期の溝や土坑が見つかりました。その中でも、弥生時代後期～古墳時代前期の溝には、約 560 本の杭が何回かに分けて打ち込まれていました。ここからは、弥生土器や土師器のほか、豊作祈願や死者を葬るなどのマツリに使用した鳥形木製品が出土しました。

５区



古代から中世の建物跡や溝などが見つかりました。中世には、曲物がはめこまれた井戸や溝がありました。平安時代頃には、１間×２間と小規模な掘立柱建物が３棟建てられていました。これらは、当時の人々が暮らしていた住居または倉庫だったと考えられます。

６区

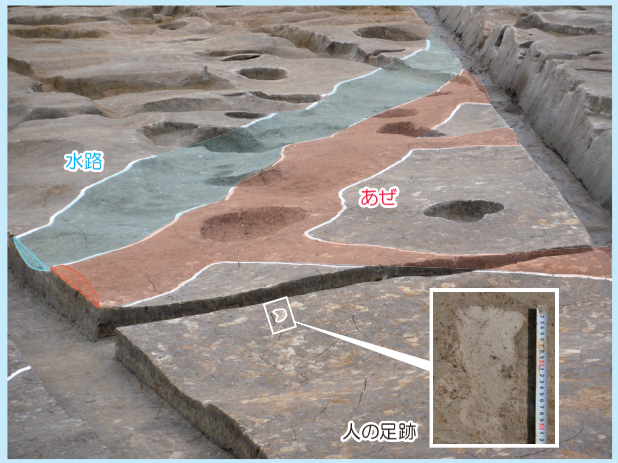


古墳時代前期から中世の建物跡などが見つかりました。古代から中世には、柱穴の底に礎盤石が敷かれた大型の掘立柱建物が建っていました。また、古墳時代前期には、竪穴建物が２棟とその南西には土器溜まりがありました。竪穴建物は方形または長方形で、大きな方は 5.7 × 4.5 ｍを測ります。土器溜まりには、ミニチュアの土器や土師器とともに拳大の石がまとめて置かれていました。建物に住んでいた人が土器や石を使ったマツリを行っていたのかもしれません。

弥生時代の水田（１－３区・１－４区）

１－３・１－４区では、古代の遺構の他に弥生時代の田んぼのあぜや水路などが見つかり、一帯が水田として利用されていたことが明らかになりました。

弥生時代の水田



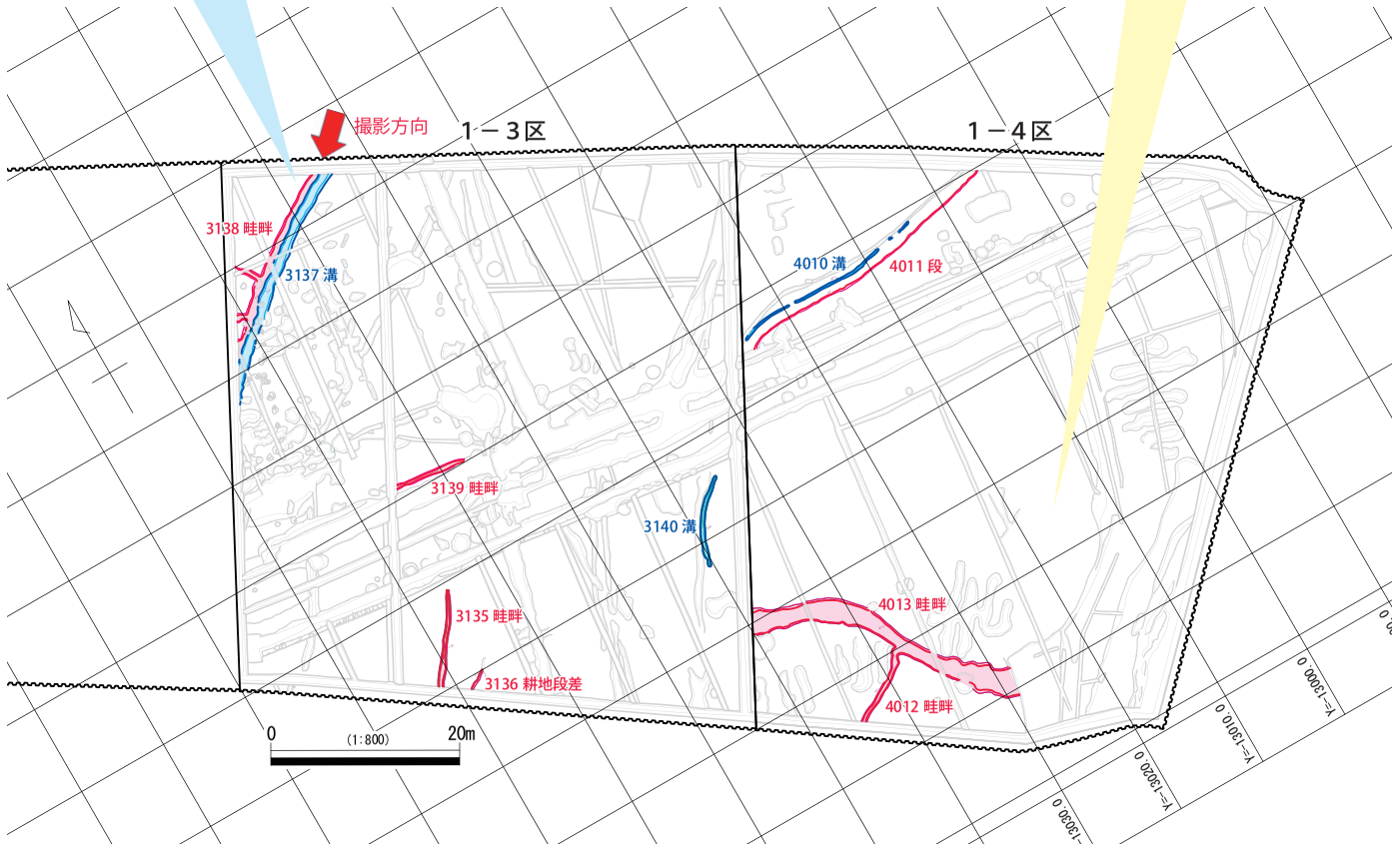
大小のあぜが直行しており、現在の水田より小さく区画されていました。大きいあぜに沿って設けられた水路によって、水を行き渡らせていたようです。

農作業をしたと思われるヒトの足跡が集中して見つかりました。

石庖丁が出土した様子

弥生時代の耕作土から６点が見つかっています。石庖丁は、穴の部分にひもを通して稲穂の摘み取りに用いられた石器です。

この一帯が水田として利用されていたことをうかがわせる遺物です。



昨年度の調査成果

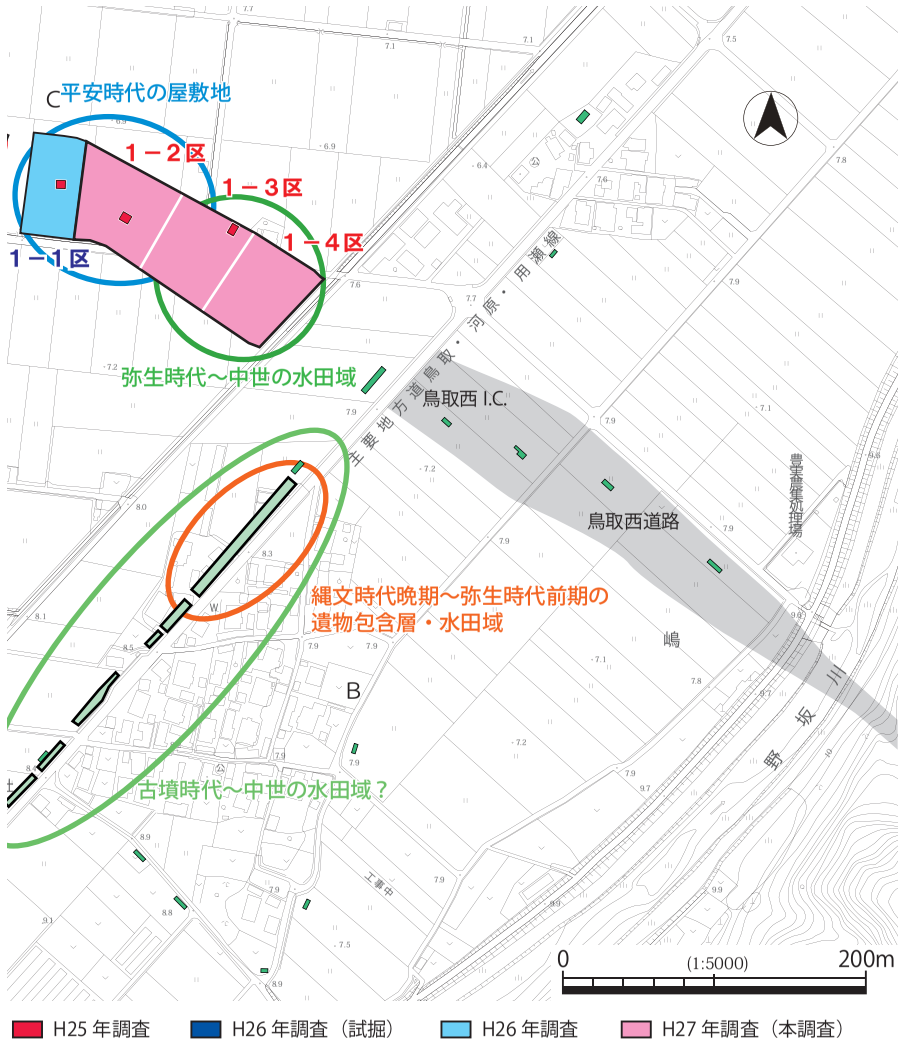
平安時代の屋敷地（１－１区）

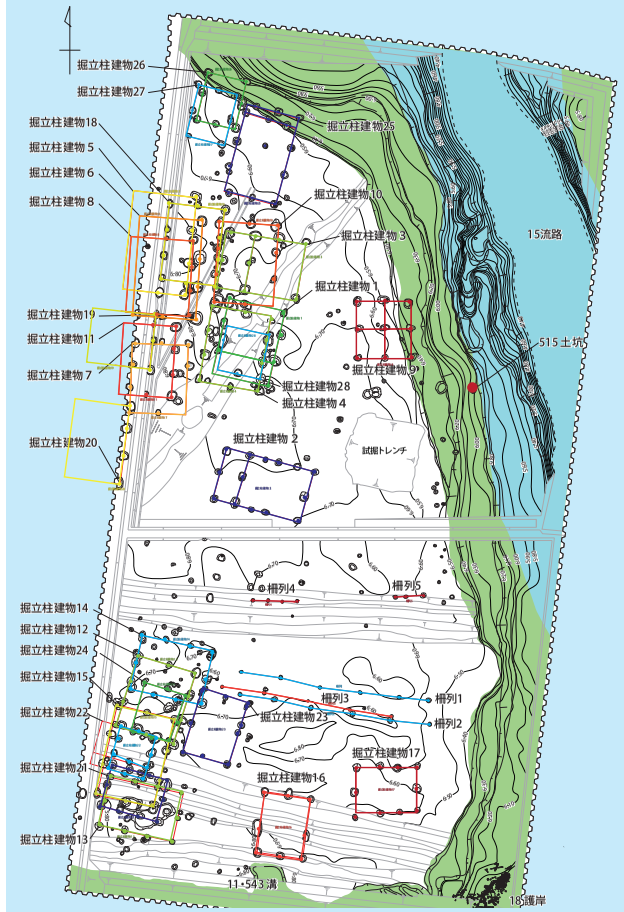
平安時代前半（約 1,100 ～ 1,000 年前）の建物群と祭祀が行われた川が見つかりました。

建物群は、27 棟の掘立柱建物で構成され、建物の周縁に柱を立てる側柱建物と碁盤目状に柱を立てる総柱建物の２種類の建物があります。３～４回程度の建て替えが行われていたようで、比較的長い間、建物群が営まれていたことがわかります。建物の周辺からは、文字瓦、和同開珎などの貨幣、緑釉陶器など、当時の有力者が存在したことを示す遺物が見つかっています。

また、調査区東側を流れる川（15 流路）からは、墨書土器や転用硯のほか、水辺の祭祀に使う人形や斎串などの木製祭祀具が見つかりました。木製祭祀具は、古代の宮殿や官衙（＝役所）などでよく見られる遺物です。

これらのことから、この周辺は古代の役所関連施設または有力者の住まいであったと考えられます。





平安時代の建物群（１－１区）

弥生～古墳時代の居住域（２区・３区）

２区では、弥生時代後期～古墳時代前期（約 2,000 ～ 1,700 年前）の集落に関わる遺構が高い密度で見つかりました。

３区では、弥生時代の布掘建物（柱を据えるための穴を細長く溝状に掘った建物）が見つかりました。建物の規模は長さ 9.5 m以上、幅 4.0 mとなります。

２区遺構検出状況

３区完掘状況

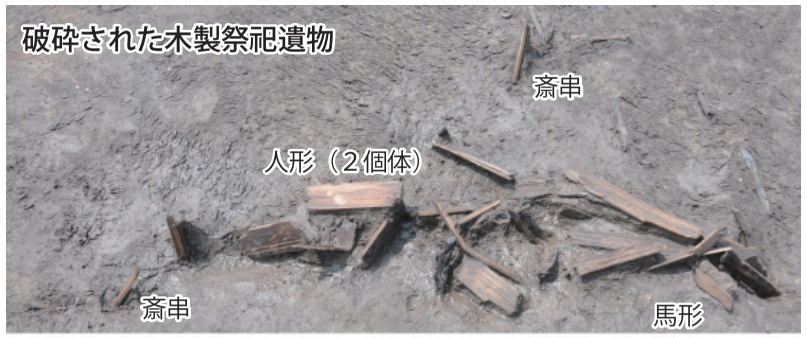
水辺に広がる古代の屋敷地（１－１区・１－２区・１－３区）

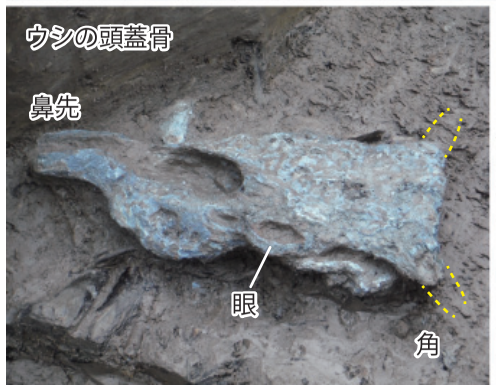
奈良時代から平安時代の大桙遺跡には、有力者の屋敷地がひろがっていました。屋敷地の近くには川が流れており、その川の岸部では木製祭祀具などを使った祭祀が頻繁に行われていました。

① 水辺の祭祀

平安時代の川（15 流路）の岸部から、木製の人形や馬形、ウシやウマの頭蓋骨などがみつかりました。これらの遺物の周りには、斎串が取り囲むようにみつかっており、祭祀を行っていた場所であることが分かりました。

人形は、穢れや災いをうつし、水に流すことによって祓えを行う道具と考えられています。しかし、今回の調査では、人形などの木製祭祀遺物が細かく破砕され、岸辺にそのまま廃棄されたものも多く見つかっています。このような行為が確認された例はめずらしく、古代の祭祀を解明する上で、貴重な手掛かりとなりそうです。

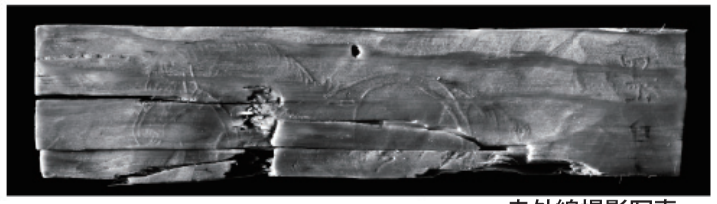




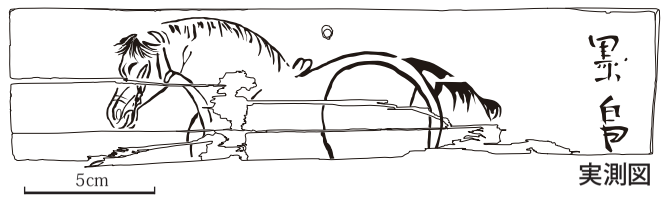
平安時代の絵馬

川の岸辺からは、平安時代の絵馬も出土しています。平安時代の絵馬の出土例は全国的にも少なく、県内では初めて出土しました。馬は写実的に表現されており、手綱の表現も認められます。絵馬の右側には、墨で書かれた文字も確認できます。

斜光撮影写真



赤外線撮影写真



実測図

※絵馬の写真は奈良文化財研究所撮影

※文字については、今後詳細に検討していきます。

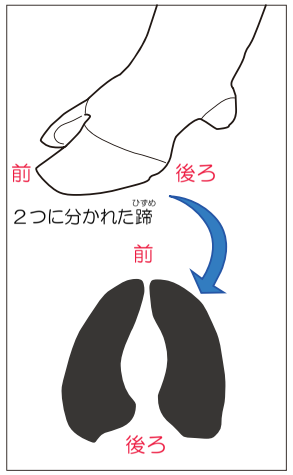
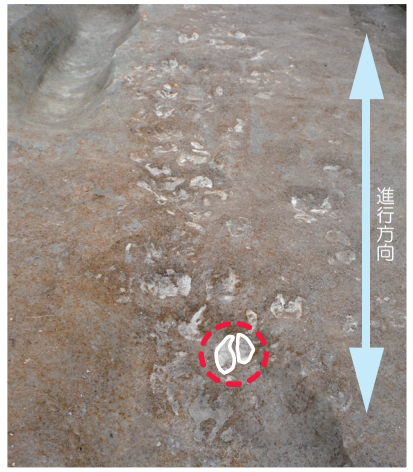
② 掘立柱建物群

川（15 流路）の東側（右岸）には、８棟以上の掘立柱建物が見つかっています。いずれも南北方向に長い建物であり、なかには、木柱の根本部分が残っていた柱穴もありました。一部の建物は重なり合っていることから、同時期に建っていたものばかりではなく、建て替えも行われていたようです。

川（15 流路）東側の掘立柱建物群

柱穴から出土した須恵器の蓋です。つまみの部分には「×」の墨書が見られます。

耕作地

掘立柱建物群の東側では、水路やあぜの跡がみつかり、広い範囲が水田として利用されていたことが分かりました。水田の耕作にはウシが用いられたようで、同じ方向に何度も往復する足跡が確認されました。

また掘立柱建物群の南側の一部では、畠の畝間と思われる平行した溝が見つかっており、畠作が行われていたと考えられます。